

氏名	一言英文
学位の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	甲文第90号（文部科学省への報告番号甲第320号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年3月3日
学位論文題目	文化的文脈における社会的感情に関する心理学的研究
論文審査委員	（主査）教授 松見淳子 （副査）教授 成田健一 教授 藤原武弘

論文内容の要旨

本論文の著者、一言英文氏は、かねてから人間の感情と文化の関係について心理学的研究を行ってきた。本論文は、日米や日豪の大学生、日本人大学生や日本人前期高齢者を比較することで心理的負債と幸福感という感情経験の文化的基盤について検討したものである。

本論文の第1の目的は、感情の中でも特に文化的多様性が高いとされている「心理的負担」に関する理論モデルを検証することである。第2の目的は、文化間の共通性が高いとされている「幸福感」における文化的基盤を明らかにすることである。具体的には、日本、アメリカ、オーストラリアの大学生を比較することにより、感情の文化的基盤に関する仮説モデルの検証を行っている。さらに、それぞれの国文化に優勢な文化的次元と個人が抱く文化的自己観に一貫性があることも検討している。

第1章では、感情の文化的基盤に関する詳細な文献のレビューを展開している。感情研究の進化論的アプローチと文化的アプローチを大別したうえで、両アプローチに基づく感情の比較文化研究の成果を整理し、文化的文脈を考慮した感情の機能について論じている。Hofstede（1980,2001）や Triandis（1995）が定義した国文化を規定するとされる個人主義と集団主義の文化的次元、および個人を規定するとされる相互独立的自己観または相互依存的自己観（Markus & Kitayama,2001）が感情の比較文化研究にどのように取り込まれているかという点についても検討している。

第2章では、2つの研究が報告されている。研究1は Greenberg（1980）が提唱した心理的負債モデルに文化的文脈を取り込み、インターネットを利用した調査法によりモデルの文化妥当性を検証したものである。アメリカの大学生では自己の利益（benefit）に比重をおくことで心理的負債が感じられるのに対し、日本の大学生では他者の労力（cost）に比重を置くことで心理的負債が感じられることを示している。研究2でも同様の文化差が日本とオーストラリアの大学生を対象とした調査で得られた。研究2では、2週間に亘る日記調査法により援助の日常の実践と文化的要因との関係から心理的負債の低減について検討している。オーストラリア人大学生では、自分から援助を要請した場合には返報するまでは心理的負債感が高まるのに対し、日本人大学生では他者が援助を申し出てくれた場合には返報するまで心理的負債感が維持され低減しないことが示された。他者への迷惑を最小化し、内集団からの排除を避けるために機能するとされる心理的負債は、周囲の他者と協調するという文化的課題を達成するための社会的機能を担っていると考えられる。このように関係性を重視する文化における自己実現については、従来の自己を中心とした主観的幸福感の尺度を用いた研究では考慮しきれていない余地があると論じた末、本論文は、人と人との協調的関係を取り入れた主観

的幸福感の比較文化研究へと展開していく。

第3章は、5つの研究報告（研究3—研究7）により構成されている。研究3は、日本人大学生の「人生満足感」に関する予備調査で得られた情報をもとに、本調査を行い、日本の大学生は向上心や対人関係に価値を置いていることを明らかにしている。研究4は、アメリカ人大学生と日本人大学生の人生満足感の経験敵比較を目的としたものであり、日本とアメリカでの予備調査を経て、人生満足感（life satisfaction）に最も関連すると判断された日米の項目への回答を双対尺度法により分析している。結果、日米の大学生に共通する人生満足感の下位概念と相違する下位概念があることが分かった。アメリカの大学生は、自己の目標や自己の成功など抽象的な自己理想を幸福として意味づけているのに対し、日本人大学生は具体的な日常的事象に対する満足を幸福として意味づけていることが明らかになった。これらの知見を応用し、研究5から研究7では、文化的自己観と主観的幸福感の関係に焦点をあてた実証的研究が展開されている。周囲の他者との協調、平穏無事であること、人並みであることで表される強調的幸福感の測定を目的とした新しい尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討している。アメリカ人大学生と比べて、日本人大学生では協調的幸福感尺度の妥当性がより高くなるという結果も得られた。研究6では、日本国内で協調的幸福感尺度による年齢間比較を行い、日本人前期高齢者の精神的健康は、従来の主観的幸福感尺度よりも協調的幸福感尺度のほうがより有効に予測されることが示された。研究7では、協調的幸福感尺度による文化的自己観への調整効果を検討した結果、協調的幸福感とは日米の大学生の間で文化的自己観によって調整されることが明らかとなった。

第4章、総合論議では、7つの研究から得られた結果を踏まえて、人間の社会的、精神的適応に関わる感情研究において文化的基盤を考慮することの重要性を論じている。著者は文化的背景の異なった人々の移動が流動的なグローバル化時代に、感情の持つ重層的な機能を明らかにすることの必要性を説き、心理学における比較文化研究の価値を確認して論文を結んでいる。

論文審査結果の要旨

一言英文氏の博士論文研究は、心理学の根本課題である知情意の一つであり、人間の認知や行動と密接な関係を持つ感情について、これを文化間で比較することで感情経験の文化的基盤に対する理解を深めたものである。近年、感情の概念や言語は、文化的、言語的に世界中で多くの類似点がある一方で、多くの相違点も同様に存在することが明らかとなっている。本論文は、異なる文化では感情経験に異なった意味を帰することを科学的な手法により探究した力作である。

感情の社会文化的機能を扱う研究は近年、特に自己意識や道徳が大きな役割を果たす社会的な感情に文化差が認められることから注目されている。自己意識や道徳は人間の自己観と密接な関わりを持つが、自己観には文化的な基盤が存在することも近年注目されている。博士論文に掲載された研究では、それぞれ最先端の手法を用いて「文化を解体」(unpackage)し測定することにより、文化間の相違点を明らかにするという手続きを踏んでいる。なかでも、個人主義の文化の次元は、人間のアイデンティティの文化的多様性を規定する価値観の次元であり、人間の自己観の文化差を規定することはすでに多くの心理学的研究において示されている。本論文は個人主義文化と集団主義文化を比較することにより、感情経験についてこれまで欧米で積み重ねてきた知見を文化的な観点から拡張するものである。

本論文は、感情の中でも特に文化的多様性が高いと注目され、社会的感情の一つとして認識されている「真実的負債」(Greenberg,1980)と、一般に文化間共通性が高いとされている「幸福」についての一連の研究を報告している。感情は文化的背景に依存して認知的評価や意味づけが異なることを、主観的幸福感の系統的な調査研究により検討している。近年、心理学で注目されている自己意識的感情は、人間の自己概念と

社会規範の学習を必要とする感情であり、それゆえ感情の社会文化的機能に関わる感情であると論じられている。本論文では、一連の研究により、感情を、個人、二者間、集団、社会文化レベルにおける機能を平行して持つ行動であると捉え（Keltner & Haidt,1999）、自他の相互関係に関する認知を必要とする心理的負債（indebtedness）の日米比較および日豪比較を通して、自己意識的感情が文化的価値を反映する可能性が示された。一言氏は、研究の総まとめとして文化的自己実現に関するモデルを提唱しているが、博士論文研究の結果はモデルの設定が妥当であったことを示唆している。

本論文で報告された7つの研究は、そのつど敏速に国内あるいは海外の主要な学会で精力的に発表されており、直接本論文には含まれていない研究も入れると一言氏の学会発表はすでに17回を数えるものとなっている。博士論文の基盤となった研究の一部は学会誌に数本掲載されており、心理的負債の理論的背景については著書にも分担執筆の形で公表されている。一言氏は、国際比較文化心理学会（International Association for Cross-Cultural Psychology）やアメリカの社会心理学・パーソナリティ心理学会（Society for Social and Personality Psychology）、あるいはアジア社会心理学会などにおける活発な学術活動を通して、海外の研究者と共同研究を行う基盤を築いてきた。そして、4月からは社団法人国際経済労働研究所の準研究員としての採用が決まっている。

論文の課題としては、比較文化心理学研究では常に問題とされることであるが、本論文においても主要な概念のさらなる定義的解明が望まれる。また、将来の研究においては、モデルの一般性を確立するために大学生のサンプルを拡張することも必要である。研究6では高齢者を対象に調査を行っていることから、一言氏はすでにこの課題に取り組み始めていることが分かる。心理学における比較文化研究は常に理論的にも方法論的にもチャレンジをはらんでいるが、今回の博士論文口頭試問の答弁から一言氏がこれらの問題について深い理解を示していることを追記しておきたい。

以上、審査委員会は、本博士学位申請論文を慎重に審査し、また2010年2月16日にハミル館会議室で実施した口頭試問における結果と学会などにおける諸活動から判断し、一言英文氏が博士（心理学）の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達したのでここに報告する。